

## パネル企画 「思想としての生命」 趣旨説明

沖 永 宜 司

こんにち目まぐるしく発達しつつある生命技術は、私たちの根本的な生命観をも変えようとしている。再生医療、臓器移植、出生前診断など、生命倫理分野で頻繁に議論されているトピックスに限って注目してみても、ここでは与えられた生命というか

つつの生命観から、操作される生命、選択され利用されるものとしての生命への転換が強く見受けられる。また、脳神経科学の分野でも、人格的な判断主体であったはずの意識は、薬物によつてのみならず、電極などの物理的刺激によつても、人為的に操作可能になりつつある。そして、そこで操作、選択するものは、現代を支配する私たちの欲望である。

こうして私たちは、果てしなく加速する科学技術の発展に便乗し、生命を私たちの要求のままに操作し続け、際限のない自己拡大を展開しつつある。しかしここで忘れられているのは、この操作をする側も与えられた生命であるという事実である。

そこで私たちは、何のためにこれらの操作を行い続けるのか、この欲望の根底にあるものが、果たして本当の意味での幸福を導くのかについて、根本的に考え直す必要がある。

そこでこのパネル企画では、現代の具体的問題に目を配りつつも、哲学、思想系の学会パネルであることを鑑み、生命観の原点に立ち返り、根本的な反省を行うことから始めたい。そのためには、私たちがこれまで立脚してきた東西の生命観をもういちど吟味し、投げかけられている問題を見直す必要がある。その上で、将来あるべき生命観を模索していくことを目的にしたい。このパネルの全体的なテーマに、「思想としての生命」という、一見抽象的な言葉を用いたのも、思想、哲学レベルでの生命観の根本的な問い直しという目的を立てたためである。このテーマは生命に関する多岐の問題に関連し、また汲みつくしがたい奥行をもつため、計三回、三年にわたる連続パネル

として議論を深めることを、理事会でご承認いただいた。そこで第一回は、生命が与えられる出来事に着目し、「出生と生命」と題して、三人の方々に、それぞれの研究関心に関連させながらご発表いただくことにした。実際、今回の二〇一四年の大会では、この「出生」という出来事の思想的な意味、そして出生に関わる倫理的、実践的な問題が取り上げられた。

田中かの子氏は、生命操作が人間にもたらす恩恵は認めつつも、生命の「ありのまま」引き受ける次元を考え、それを宗教的な「智慧」とする。そこからすると生命操作の人為性は、「自然の／神の摂理に介入」する試みなのである。人為的操作を断念することが「智慧」であるというのは逆説的ですからあるかもしれないが、それが本来の生命の姿だとする文脈である。

現代の生命倫理の具体的問題を論じる安藤泰至氏も、医療技術を用いた妊娠・出産への人為的介入を批判的に検討し、出生という根源的な出来事を完全にコントロールできると思うのは幻想だという。そしてこのコントロールは、却って人生の現実と向き合い、生と死について問う力を削ぐものだという。

金子昭氏は哲学的人間学の立場から、人間的生命、つまり「いのち」を「単なる生命+ $\alpha$ 」として捉え、 $\alpha$ の部分に精神、靈魂、人格を見る。そしてこの $\alpha$ は贈られるものであり、人為性を超える。技術は不死を目指すにもかかわらず、人為的であるゆえに不死を実現できない。反対に不死を目指すとする人為性を捨てたところに、死を超える可能性が開示されるという

逆説が、ここに暗示される。

このような生命の本質が究極的には人為性を超えるという示唆を受け、来年度以降はまず、生きていることの定義の再検討を通じ、生命観の見直しを行う。つまり、現代の生物学や脳神経科学などの知見も踏まえながら、哲学の立場からの生命の定義を再検討することである。それは生命を物質の一樣態として見なすのか、それとも何らかの意味で物質とは異なった存在として見るのか、という問いにつながる。二元論や生気論は、かつて物質から区別された生命を肯定する概念だったが、そうした概念が効力を失った現代において、なお生命はどのように世界の中に位置し得るのかを問い直す。

さらに、生命の否定としての死を問い直す。私たちは生きていく限り、死を避けることはできず、生の先に死を意識せざるを得ない。そして死が消極的でしかないのは、生と死とを対立させた上で、前者のみに無条件な価値を置くことに起因する。しかし死は常に反価値なのだろうか。むしろ死を通してこそ生が価値づけられ、その自覚が却って生を際立たせることはないか。このように死の価値を問うことは、死を無条件に忌避し続けてきた現代の文明のあり方を問い直すことでもある。このように、生命にとって死の意義はどこにあるか、死は無なのか、生死は最終的に対立するか、死の受容は可能か、といった問題を、「死をめぐる生命」として最後に扱ってみたい。

(おきなが・たかし、哲学・宗教学、帝京大学教授)